

異年齢集団での読み聞かせにおける子ども達の相互作用について

長 咲依

現在、絵本の読み聞かせは保育現場や図書館、書店、集いの広場といった様々な場で実施されている。これらの場では集団に対して読み聞かせが行われており、その効果として聞き手同士の感情の共有が期待されている。先行研究では読み聞かせに対する子どもの反応は年齢によって差があるため、集団は同年齢で構成されるのが望ましいとされてきた。しかし、実際の読み聞かせ場面は様々な年齢の子どもが混ざる異年齢集団の状態で行われることも多い。これまで、同年齢集団への読み聞かせの特徴は明らかにされてきたが、異年齢集団への読み聞かせの特徴については十分に明らかにされていない。

そこで本研究では異年齢集団への読み聞かせの特徴を明らかにし、その意義について考察することを目的とする。具体的には、同年齢集団と異年齢集団、それぞれの読み聞かせの様子を観察し、その違いを比較する。観察する項目は集団への読み聞かせに関する先行研究の分析項目を参考に「絵本への視線の向き」、「笑い」、「発話」の三点に設定した。

観察対象は茨城県内の保育園に通う5歳児19名と3歳児19名である。実験は、1.同年齢集団への読み聞かせを行う、2.各年齢を二つのグループに分け、組み合わせることで異年齢集団を二つ作る、3.二つの異年齢集団への読み聞かせを行う、という手順で実施した。視線の向きと笑いを捉えるためにビデオカメラ3台を用いて動画を記録し、発話を捉えるために園児一人ひとりにICレコーダーを装着させて音声を記録した。動画は1秒ごとの画像に分割し、視線が絵本に向いている時間と笑っている時間を計測し、音声から発話の回数を計測した。

分析の結果、視線が絵本に向く時間は5歳児、3歳児ともに同年齢集団時と異年齢集団時で有意差は認められず、全体的に集中していた。笑う時間は3歳児について異年齢集団時のほうが有意に長くなった。動画からは5歳児の笑う姿を見て笑う3歳児の様子も観察された。発話回数は5歳児、3歳児ともに異年齢集団時のほうが有意に多くなった。更に、発話内容は5歳児は展開の先読み、3歳児は他児の発話の復唱が加わることが分かった。

本研究により、異年齢集団への読み聞かせは「笑い」や「発話」に影響があり、集団への読み聞かせの意義である「感情の共有」を「楽しさ」という側面からもたらす可能性が示唆された。今後の課題としては、絵本を読む順を変えて、本実験で得られた結果の要因を特定することが挙げられる。更に、子ども同士のやりとりを分析することや、「楽しさ」以外の「悲しみ」や「恐怖」といった他の感情にも共有が見られるかどうかを絵本の性質などを変えて検証する必要もあるだろう。

(指導教員 松村 敦)